

氏名	津田 道子
ヨミガナ	ツタ ミチコ
学位の種類	博士（映像メディア学）
学位記番号	博映第5号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 「見ることは考えること」をめぐる映像家メディア論～映像作品が成立するための同時代性と自己言及性

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	藤幡 正樹
（副査）	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桂 英史
（副査）	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桐山 孝司
（副査）	東京藝術大学	准教授	（映像研究科）	長嶋 寛幸
（副査）	専修大学	教授		貫 成人
（副査）	青森公立大学	学芸員		服部 浩之

（論文内容の要旨）

本論『「見ることは考えること」をめぐる映像メディア論～映像作品が成立するための同時代性と自己言及性』は以下の三部から構成される。

第一部は本論の背景について解説する。解説にあたっては、映像メディアがどのように社会に受け入れられてきたか、その展開を技術の発展や社会の状況を踏まえながら振り返りつつ、ヴィト・アコンチ、ピーター・キャンパス、ダン・グラハム、ナムジュン・パイクが、その時代に他の表現メディアからどのような影響を受けながら、映像メディアの技術的特性をいかに暗示力豊かなものにしてきたのかということを分析し、自らの作品が成立するに至った「同時代性」と「自己言及性」を検証する。

第二部は自作について詳説する、本論文の核心部分である。詳説にあたっては「同時代性」と「自己言及性」をキーワードとしながら、自らの実作を映像がもつ固有の性質、つまりメディウム・スペシフィシティという観点から論じる。

《配置の森の住人と王様》において、「配置の森」は、人が十分に映り込む大きさの枠付きの鏡と、それと同様の枠とまた同様の枠付きの白い壁からなるスタジオ空間を指し、視覚的に様々な関係、の複雑さに暗喩的に作用しながら映像内の時間は進行する。映像作品の中にはセットと人物がうつり、単純な振り付けに従ってシンプルな動作が進行する。「配置の森」を用いたインスタレーションを歩く鑑賞者は「住人」であり、その奥の部屋で上映されている映像を撮影するカメラの視点は「王様」である。このとき映像にうつるパフォーマーは、像だけでなく実在しており彼らも「住人」であるが、インスタレーションの鑑賞者とは同一になり得ない。さらに、撮影時にパフォーマーは自分が空間の中でどのようにうつりこんでいるのか、ビデオカメラの横に設置されたモニターで見ながら撮影しているという映像メディア特有の制作過程（メディウム・スペシフィシティ）からも、この作品はセットと鏡と映像が一体化している映像についての映像である、ということが成立条件となっている。

さらに、フランス人アーティストのキャロライン・バーナードと、インターネットを介して共同制作しているMigratory Projectは、インターネット上にある視覚的な状況に着目しており、現代の映像メディアの技術的特性、物理的特性がもたらす視覚表象の差異を内省的に検証し作品にしている。空間的には離れたところにながら、インターネット上にある視覚的な状況に着目して共同制作しており、技術的特性、物理的特性がもたらす映像メディアの見え方の違いを扱う。この中から《HACHIOJI Hole in Gap -the crossing of zebra times》と《reward》について詳説する。《HACHIOJI Hole in Gap》は八王子にある交差点の出来事を

webcamで捉えインターネット経由でフランスから記録し、さらにSDフォーマットのカメラでも機影し、二種類の映像を用いている。webcam経由で撮影したものは、解像度やフレーム数がインターネットの接続状況によっており、二種類の映像は同じ出来事を捉えているのに、その仕様の違いから全く違うテクスチャを持ったものになっている。その違いを強調するように、二つの時間軸をまた違うテクスチャに編み上げている。

第三部は本総の結論である。『「見ることは考えること」をめぐる映像メディア論』にとって「同時代性」と「自己言及性」が作品の条件になるだけでなく、鑑賞者にとっての陶酔となることを論じる。

映像メディアは、映像装置という像を映すハードウェアとほぼ一体になって、いまや我々の生活空間の一部になっているといえ、我々は映像作品を鑑賞する時間よりも、日常生活のなかで映像に接することに圧倒的に長い時間を過ごしている。日常生活の中で映像装置とスクリーンにあらわれる像を区別することはあまなく、映像を見ると映像を見ているということを忘れ、実空間を見るように像を見ている。技術的特性、物理的特性を示唆することは、モニタ自体と映像を区別することにつながり、その「映っている状態」から映像自体の鑑賞が始まる。さらに、映像はうつりこむ人物に鑑賞者自身を転移させることに適したメディアであるといえよう。その転移はこれまでテレビ、映画などで巧みに実践されており、いつの間にか鑑賞者は映像内の出来事の主語になっており、ときには登場人物を飛び越えて、像の中に自分の内面を見ている。

同時代的、自己言及的なレイヤーに気付きながら、『これは映像である』ということに到達することは映像作品を見るための成立条件であり、鑑賞者をいかに自己陶酔的にそこへ飛び込ませるか、ということが私にとっての芸術表現である。

(総合審査結果の要旨)

津田道子の博士課程学位審査は、【研究作品】を中心とした審査であり、作品展示の評価と作品解説を中心とする論文の評価によって決定される。実際の作品制作展示は2012年10月末に行われた。展示は数日間公開され、主査副査以外の学生、及び学外の関係する領域の研究者等も作品を体験することができた。その後、論文審査は、2月初頭に行われ、独自の手法を用いた自作の分析解釈が高く評価された。

津田は修了作品制作以来、映像の中に鏡を用いた作品を継続的に制作して来た。映像の中に鏡をとりこむことは、普段の現実の中で鏡を自由に見ることとは異なり、カメラを通して観客の視点を固定することができるので鏡の中と外のイメージの差異をわかりにくくすることができる。このことは、鏡の特徴を任意に抽出して提示することを可能し、鏡を表現の対象とすることを可能にする。博士課程期間中、津田はカメラと鏡の間にさまざまな関係性を作り出す作業を通して、一歩ずつその特性を拡張してきた。

中でも本論文では、「round around the center of view」、「あたたとわなし」、「配置の森の住人と王様」を集中的に取り上げ、さらに博士課程審査展示では、その集大成をみごとに成し遂げた。「round around the center of view」は、鏡の前でカメラ付き携帯電話を回転させながら撮影する自分を撮影した作品である。「あたたとわなし」は、部屋の中心線に鏡を置くことで、鏡の中に写る手前の壁が奥の壁とピッタリと位置合わせされて、まるで連続するよう見えるというトリックの部屋を用意し、そこにパーフォーマーを廃することで、意外にもそこに不連続性が出現するという作品である。これらは映像作品として制作されたのに対して「配置の森の住人と王様」は、大型の鏡を多数用いたインスタレーション作品になっている。しかしまた、記録として撮られた映像も独立した作品であるとしている。インスタレーションとすることで、フレーム付き大型鏡には滑車がついており、自由に移動させることができ、それぞれの配置によって特殊な関係性を作り出し、また変化させてゆくことができる。記録映像では数人のパーフォーマーがマジックのようにつぎつぎそうした特殊解を披露してゆくようになっている。

博士課程審査作品展示において公開した作品は、インスタレーションとして完成されており、個々の鏡や枠は特殊な配置として固定され、自由に歩き回る鑑賞者の視覚体験をいくつかの異なった方法によって、みごとに混乱させることに見事に成功している。課程期間中の作品制作姿勢として、またその集大成として高く評価できる。

論文において津田は、カメラのフレーム、鏡のフレーム、遡って人間の視覚（視線）もまたフレームとしてとらえ、そのフレームの中と外の関係、より詳細にはフレームの縁における連続性と不連続性の問題を、

英文法における直接話法と間接話法の違いを使って分析解釈すると同時に、見ることをひとつの機能としてとらえ、対象を見ることを関数として扱うという手法を編み出し利用することで、これら複数の作品を分析することに成功している。

関数化による解釈では、鏡の中に写る撮影者とカメラといった階層構造を記述するのには非常に便利であるが、主体の変化を記述することが難しいのに対して、話法を用いた解釈では、間接話法で書かれた一文を直接話法に開いた時点で、見ている（話している）行為者（主体）が誰であるかによって、話者の言説内の主語が変化してしまうので、鏡を見ている主体とその中に写っている客体（実は見ている本人）との関係、とくに鏡のフレームの効果を説明する上で非常に有効である。実際には、個々の作品においてこれら両方の分析方法を用いることで、見事な分析を行った。

実際の作品では、鏡と人間だけの問題ではなく、鏡の入っていない枠、映像をディスプレイする枠などがあり、さらにそこに固定されたカメラや自分以外の鑑賞者がいるわけであり、それぞれの状況の中で、それぞれの鑑賞者の立ち位置によって、その記述、分析の結果が変化してゆくことになる。すべてを記述することは不可能なので、個別の特殊事例をとりあげ、それについて詳細な解説を行なっている。現場に入った鑑賞者にとっては、これらの異なった状況が歩きまわることで緩やかに変化してゆくことも大きなファクターとなっており、単に分析ができたことで底が付いてしまう作品ではなく、長く飽きを感じさせない作品となっている。

以上、最終的な作品の制作展示における完成度、論文における自作を分析する手法の鮮やかさ、どちらもともに十分に高度な完成度を持っており、博士後期課程学位に値する。